未来を見る人

最終回

ジョセフ・E・スティグリッツ 真に「自由」な社会とは？

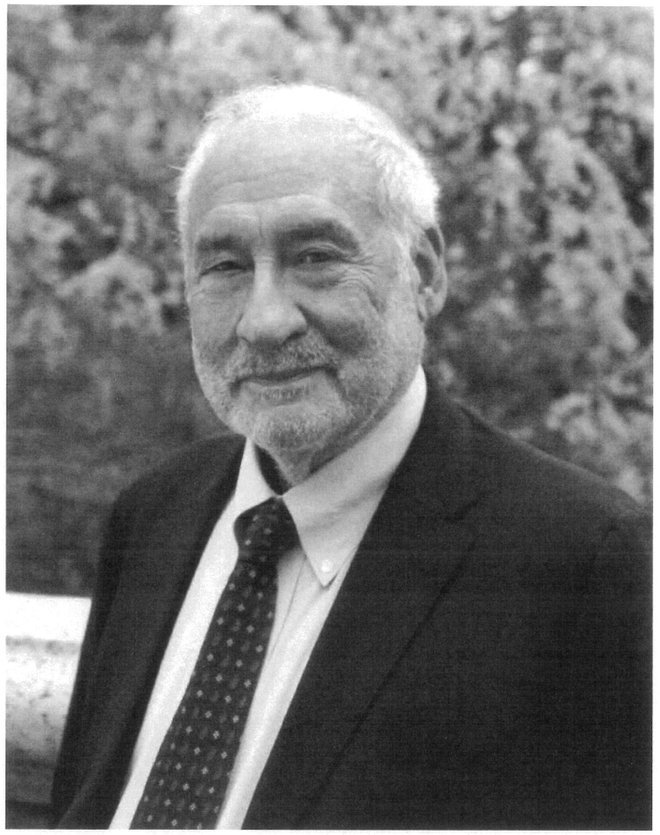


Photo by Gabriela Sciolino Plump

大野和基（ジャーナリスト）

地球温暖化による気候変動、
終わりの見えない戦争、社会を分断する格差……。
地球を覆う難問に立ち向かうには、現代社会を根本から見直す視点が必要となる。海外を飛び回るジャーナリストが、いま最も注目されている論者にインタビューしていく連載。
最終回は、「自由」という言葉をキーワードにした新著について、経済学の世界的泰斗に訊く。

——まず、あなたが新著『資本主義と自由（The Road to Freedom Economics and the Good Society）』を執筆した動機は何だったのでしょうか。

ジョセフ・E・スティグリッツ（以下、スティグリッツ） この本を書いた時期、私は政治的な局面におりました。二〇二四年の大統領選挙前だったのです。政治的な議題となり得る問題はたくさんありましたが、私は「自由」という概念が最も重要だと考えました。そのとき共和党右派が「自由」という概念を、自分たちに都合のよい言葉として使っていたからです。私は彼らが「自由」の本当の意味を理解していないという結論に至りました。共和党右派は、「Freedom Caucus（自由議員連盟）」を組織していましたが、私は彼らこそが人々から自由を奪っていると考えていました。

彼らは三つの点で自由を理解していません。第一に、私がこの本で提唱する「自由」の概念は、可能性の自由です。人間が自由である、ということは、その人が自らの可能性を追求できるということです。ですから、飢餓の危機に瀕（ひん）している人は自由ではありません。彼らには選択肢がないからです。彼らはまず、生き残るための行動をするしかない。

私たち（民主党サイド）は、誰もが自分の可能性を最大限に活かせるようにすることをめざしていました。教育、健康、必要なものは何でもです。我々は人々の自由を拡大しようとしていましたが、共和党右派は人々から資源、教育、健康を奪い、つまりは人々の自由を奪っていたのです。これが、彼らが自由の概念を理解していない最初の理由です。

二つ目と三つ目は、新型コロナウイルスのパンデミック中に非常に明確になった考えです。まず二つ目。右派の多くの人々は、ワクチン接種やソーシャルディスタンス、マスク着用を義務づけることは自由の侵害だと主張しました。しかし、彼らにそうしない自由を与えれば、他の誰かが病気にかかり、入院し、亡くなることにもなりかねない。なので私には、彼らは他の人の自由を奪っているように思えました。つまり、彼らは、私たちの相互依存的な社会では一人の自由が他の人の自由に影響を与える可能性があることを理解していなかったのです。

彼らは絶対的な自由を欲していましたが、私の見解では、ある人に絶対的な自由を与えることは、他の人の自由を奪うことに等しいのです。社会においては、こうした点を議論すべきです。

信号機は個人の自由を規制するが全員の自由を増大させる

三つ目の考え方は、もう少し微妙で複雑なものです。それは、時には個人の自由への「制限」がより多くの人の「自由」を増大させることもあるということです。皮肉な話に聞こえますが、私が本書の中で挙げている例は、信号機が自由を侵害しているということです。青になるまで動けませんから。これは規制です。でも、ニューヨーク市に信号機がなければ、人もクルマも交通渋滞に巻き込まれ、誰も動けなくなります。ところが、信号機があれば交代で通行でき、渋滞は軽減され、全員の自由度が高まります。行動の可能性が広がるのです。

もう一つ例を挙げれば、新型コロナウイルスが大流行したとき、mRNAワクチンが開発されていなかったら、私たちは皆、ずっと自宅に閉じこもっていたでしょう。そして、mRNAワクチンを開発するには、公的資金が必要でした。公的資金とは、税金のことです。税金は縛りです。政府にお金を与えなければなりません。しかし、政府に少しのお金を与えることで、私たちは普通の生活を送ることができるようになりました。つまり、少しの縛りが、非常に有意義な意味で私たちの自由を拡大したのです。

——あなたはこの本の「まえがき」で「オオカミにとっての自由は、往々にしてヒツジにとっての死を意味する」という哲学者の言葉を引用しています。「自由」という言葉は、常にトレードオフ（一方を追求すれば他方が犠牲になる）の関係を伴っていることを理解することが重要だ、ということでしょうか。

スティグリッツ そうです。ほとんどの場合、トレードオフを考慮する必要があります。mRNAワクチンの例は、すべての人の自由を拡大できる場合です。自由とは、時にはトレードオフを伴います。私たち自身の自由を少し手放すことで、自らの自由を拡大することができるのです。

——あなたが本書で言う「アメリカは自由の原則に基づいて建国されたという考えに染まったアメリカ人」にとって、「自由」という言葉は大きな意味をもっていると思いますが、その「自由」の意味は歴史とともにどのように変わってきたのでしょうか。その解釈はアメリカと他の国では違うのでしょうか。

スティグリッツ 自由の意味や自由に対する私たち

ジョセフ・E・スティグリッツ
Joseph E. Stiglitz

経済学者。ノーベル経済学賞受賞者。1943年、アメリカ・インディアナ州生まれ。アマースト大学、マサチューセッツ工科大学を経て、イェール大学、スタンフォード大学、プリンストン大学などの教授を歴任。クリントン政権時代の大統領経済諮問委員会委員長。世界銀行のチーフエコノミストも務めた。著書に『スティグリッツ入門経済学』（カール・E・ウォルシュとの共著。東洋経済新報社）、『世界の99％を貧困にする経済』（徳間書店）、『スティグリッツ PROGRESSIVE CAPITALISM』（東洋経済新報社）など多数。

の理解は時代とともに変化してきました。今日では、ほとんどのアメリカ人が、独立戦争は実際には「自由のための戦争」ではなく、「イギリスからの独立のための戦争」だったことを理解していると言えるでしょう。当時、アメリカ南部では、住民のほとんどが奴隷でした。もしアメリカが真の自由のみを基盤として建国されていたなら、建国時に奴隷制は廃止されていたでしょう。当時、人々は自由について非常に狭い見方をしていました。それは、裕福な白人地主がイギリスの政治的決定から独立して自らの政治的決定を下す政治的自由であり、すべての人々にとっての自由ではありませんでした。さらに政治的決定を下していたのは男性だけだったことを思い出してください。それから二五〇年後の今日、私たちは当時の自由の概念が、現代の視点から見るとたいへん偏狭なものであったことを理解するようになりました。多くの国がこの政治的自由の問題を経験してきました。今、ウクライナはロシアの束縛と戦っています。ロシアはウクライナを占領しようとしていて、ウクライナは、自分たちの国のことは自分たちで決定を下したい。戦争は往々にして誰が政治的決定を下すのかという問題です。そうした問題がなかったり、それほど重要視されていなかったりする国でも、自由の問題は存在します。政治に限らず、政府やその他の権力による支配から束縛されまいとする個人の自由の問題があるからです。権力はさまざまな形で行使されるのです。奴隷制は一種の自由の喪失でした。今日、私たちは世界中で、政治的自由という概念だけでなく、さらに重要な人権、そして冒頭でお話しした、自分の可能性を最大限に活かす積極的自由についても認識、理解し始めていると言えるでしょう。

アダム・スミスの「見えざる手」はそもそも存在しなかったのか？

——あなたは、「アダム・スミスの言う『見えざる手』（個々人が自己利益を追及すれば、あたかも見えざる手によって導かれるがごとく社会全体が繁栄と調和に向かう）が見えないのは、単にそんなものが存在しないからだ」と書き、いま起こっている経済の変化は、「初期の経済学に多大な影響を与え、いまなお影響を及ぼし続けている均衡理論が想定していた世界とは著しく異なる」と書かれています。「見えざる手」や「均衡理論」をはじめ、いま大学などの経済学の講義で習うことはもはや役に立たないのでしょうか。それとも時と場合によっては、有効なのでしょうか？

スティグリッツ　ええ、それらが役に立つ領域はあると思います。小麦の価格がどうなるかを知りたい場合、需要と供給の関係から見ることは役立ちます。それは短期的な均衡であり、経済学者が研究する多くの問題に関連しています。しかし、私たちが大きな問題、つまり長期的な成長、長年にわたる繁栄について考えるとき、均衡理論は機能せず、「見えざる手」も機能しません。例えば、今でこそ私たちは気候変動が私たちの存在を脅かす大問題であることを知っていますが、五〇年前、ましてや二五〇年前は、誰も気候変動について考えていませんでした。私たちは一五〇年前、化石燃料（石油）の開発は、人類の偉大な成果だと思っていましたが、今ではそれこそが大問題の原因であることに気づきました。これが進化の本質です。もし私たちが今日知っている事実を当時から知っていたとしたら、私たちは当時のような行動をとらなかったでしょう。今日のような状況にはならなかったはずです。そういうことは何度も繰り返されています。明らかに進化論的な歴史です。

——次に「新自由主義」についてうかがいます。あなたは「実際にはそれは、『市場に任せる』よう推奨した19世紀の自由主義やレッセフェール政策とほとんど違いはない」「新自由主義は実際のところ『疑似資本主義』でしかない。損失は社会に共有され、利益は私物化される」とまで書かれています。「新自由主義」が多くの人を不幸にしていたのでしょうか。そういう意味では、ミルトン・フリードマンとフリードリヒ・ハイエクらシカゴ学派の経済学者の罪は大きいのでしょうか。

スティグリッツ　はい、大きいですね（笑）。先ほど述べた歴史の進化論的な性質のため、彼らは自分たちの理論がどのような結果をもたらすかを予測できなかったのでしょう。彼らは自分たちの理論は、より生産性の高い社会を、より自由な社会を創造すると唱えていました。しかし本書では、彼らが本当にそう信じているのかについて、多少懐疑的な見方を示しています。なぜなら、フリードマンはアウグスト・ピノチェトを助けるためにチリに赴いたからです。ピノチェトがチリの独裁者になった直後のことです。ピノチェトは明らかに政治的自由など求めていませんでした。彼は民主的に選ばれた政府を転覆させ、多くの国民を殺しました。三万人を拘束・拷問し、処刑による死者や行方不明社は三〇〇〇人以上と言われています。フリードマンはそんな独裁者を利用して、チリ国民に自身の突飛な考えを押し付けたのです。その結果、チリはフリードマンのせいで苦しみました。彼が実際に行ったのは、少数の人々の手に権力を集中させることでした。それが、さらなる不平等を生み出し、チリ社会を機能不全に陥れたのです。フリードマンは、権力を握り続けようとする者たちにイデオロギー的な基盤を与えました。「自由市場」を利用して他者を搾取することを正当化したのです。それは苛烈で徹底した搾取で、のちに世界各地に不幸をもたらした一連の政策のイデオロギー的基盤、理論的根拠ともなりました。ここで強調しておきたいのは、私がそれらがイデオロギー的だったと考えているということです。私はハイエクを知りませんが、フリードマンはよく知っていました。私がまだ若い学者だった頃、シカゴ大学のセミナーで、企業価値の最大化が一般的に社会の幸福の最大化ではない理由を説明しました。私はすこぶる単純なモデルを使って、企業価値の最大化が社会の幸福の最大化ではない理由を証明しました。これを聞いていたフリードマンは「ジョー、君は間違っている」と主張しました。私は「どの仮定が気に入らないのか、私の証明のどこに間違いがあったのか教えてください」と訊きましたが、フリードマンは答えられませんでした。そのとき彼は理論的正しさではなく、自らのイデオロギーに突き動かされていたのです。

「自分が裕福なのか貧乏なのかわからない」状況を想像して考える。

——あなたはご著書の中で何度も、哲学者ジョン・ロールズの言葉、「『無知のベール』に覆われている自分を想像する」を引用しています。これは社会における公正さを考えるとき、とても有効な手段だと思います。このような考え方は世界に広まるでしょうか。大事なのは、やはり教育でしょうか。

スティグリッツ　ジョン・ロールズは「無知のベールに覆われている」、つまり「自分が社会のなかでどのような立場・境遇でいるかわからない、自分自身が裕福か貧乏なのかわからない」状況を頭に思い描いて、公平な社会とはどんなものだと思うか、という問いを投げかけています。私は、これが世界を考える良い方法だと思います。私たちはいつも子どもたちに「相手の立場に立って考えなさい。相手がどう思うか考えなさい」と言っています。公平性について考えるとき、もし自分が相手の立場だったら、あなたはどう思うでしょうか？　これは私たちが子どもたちに教えようとしていることの一つです。共感力を高め、他者を理解し、相手の視点から考えさせるように努めています。

大きな問題は、私たちのリーダーであるドナルド・トランプは、これをまったくやらないことです。彼は他国に要求を突きつけるとき、「もし自分が日本人、中国人、ロシア人だったらどう感じるだろうか？」とは考えません。どこの国が他国に指図されたいと思うでしょうか？　されたいとは思いませんね。それは当然だと思います。トランプは共感力に欠け、他人の立場で考える能力がまったくありません。もしかしたら、将来、子どもたちに、共感力がなぜそれほど大切か、トランプを悪い例として教えることになるのかもしれません。

——今話に出たドナルド・トランプについてですが、あなたは「両親や教師が子どもの教育に失敗し、うまく社会化できなければどうなるかを示す好例が、ドナルド・トランプである」と書いています。そして、その「トランプがいるおかげで、インドのナレンドラ・モディ首相やブラジルのボルソナロ大統領といったほかの煽動政治家が、ポピュリズム的政策を推進できるようになった」とも書いています。トランプ大

統領は世界にとって災厄なのでしょうか？　それとも今の共和党からトランプ大統領のような人物が現れたのは歴史の必然なのでしょうか？

スティグリッツ　ええ、彼はアメリカだけでなく世界にとっても災厄だと思います。この本を書いたときは、彼がどれほど大きな災厄なのか理解していませんでした。しかしこの半年で起こったことは、誰も予想できなかったほど悲惨なことです。彼が一夜にして援助を撤回しただけで、アフリカで亡くなった人の数は膨大に増えました。

――USAID（米国際開発局）閉鎖のことですね。

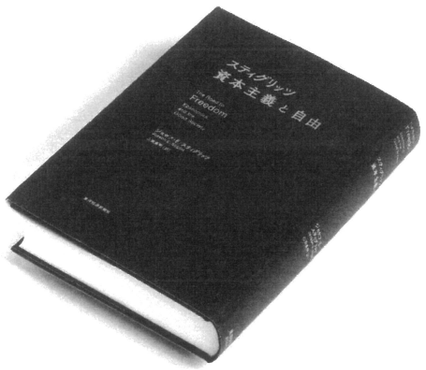
スティグリッツ　そうです。USAIDについては誰も想像できなかったものです。彼が移民問題でひどい決定を下すことはわかっていました。

ただ、アメリカの強さの基盤である科学を破壊するとは思いもしませんでした。彼はアメリカの大学を破壊しようとしています。彼が大学を嫌っていること、そして私たちが困難に直面することはわかっていましたが、それがどれほどひどい事態になるのかは理解していませんでした。国際法の規範にとって悪影響になることはわかっていました。関税違反です。それもわかっていました。国内の法規範のあらゆる側面を彼がこれほどまで踏みにじるとははわかりませんでした。アメリカが債務を返済しないかもしれないと示唆することは何となくわかっていましたが、トランプの私有地で非公式に合意された、いわゆるマール・ア・ラーゴ合意のようなものを提案するとは思いもしませんでした。つまり、彼はこれまでずっと災厄です。共和党が彼のような悪質な人物に乗っ取られたのは必然ではなかったはずなのに。本当に残念です。エリザベス・チェイニーのような人たちは、私とは多くの点で意見が異なりますが、それでも立ち上がろうとする姿勢を見せてくれました。しかし、共和党員で自分の価値観を真に主張する人はほとんどいませんでした。私は胸が張り裂ける思いでした。私の著書『世界の99%を貧困にする経済』と『PROGRESSIVE CAPITALISM』には、アメリカが許容している不平等のレベルが、煽動政治家にとって格好の土壌となっていることを書きましたが、想定以上に私たちは不運でした。私たちが受けるべき運命以上の、もっとひどい煽動政治家に出会ったのです。

アメリカはいま、中国の文化大革命を経験している。

――「人間社会は啓蒙の時代から数世紀の間に、独立した法廷、研究機関や教育機関など、真実を合理的に判断する機関を発展させてきた。……いまでは、共和党やそれと似た思想を持つ世界中の人々が、その意義を否定している」とあなたは書かれています。トランプ大統領のハーバード大学などへの迫害は、トランプ大統領だけではなく、アメリカに蔓延（はびこ）る「反知性主義」の現れなのでしょうか。

スティグリッツ　ええ、トランプの行動には二つの要素があります。一つは「権威主義」。彼はファシスト、独裁者のように振る舞っています。トランプは、あらゆる批判の源、あらゆる権力の源、そして自分たちの行動を抑制するあらゆるものを弱体化させたいのです。だから報道機関を攻撃するのです。トランプは、報道機関は人民の敵だとさえ言います。もちろん、私が政権にいたときも、批判されたいと思う人など誰もいませんでした。ですが、私たちの社会を機能させるには、私たちの肩越しに監視してくれる人が必要だと思っていました。民主主義には、



『スティグリッツ　資本主義と自由』
The Road to Freedom
Economics and the Good Society
ジョセフ・E・スティグリッツ 著
山田美明 訳 ／東洋経済新報社

「自由」という言葉の本当の意味は何なのか？　保守派が金科玉条として掲げるこの言葉は、意図的に歪められていないだろうか。「オオカミにとっての自由は、往々にしてヒツジにとっての死を意味する」。超富裕層による「自由な」搾取が、貧困層の生きる自由を奪う新自由主義の欺瞞を突き、公正かつ真に「自由な」社会を築くための方策を提案していく。

監視し、批判してくれる人の存在が必要です。監視する人は社会的にとても重要な役割を果たしているのです。

大学も同じです。大学はいわば制御システムの一部であり、社会に対し抑制と均衡を保つ役割を果たしています。終身在職権をもつ人々が、社会について書き、考え、物事がうまくいかないときは発言します。社会にとってそのような人々が重要だと私たちは賢明にも理解しているのですが、トランプは彼らを好みません。これが一つの要素です。権威主義です。

もう一つの要素は、「反体制主義」です。大学は一種の秩序を体現していますが、その秩序が必ずしもうまく機能してきたわけではありません。それは認めましょう。しかしトランプは、大学をどのように改革すべきかと考えもせず、性急に大学を破壊しようとしているのです。共和党の過激派には、反体制主義の傾向が濃厚です。つまり、私たちは六〇年代から七〇年代初頭の中国と同じような文化大革命を経験しているのです。

しかし、あなたの質問の仕方も真実を突いています。「反知性主義」は二つの主義と無関係ではありません。反知性主義は歴史的には長い間存在しているもので、アメリカの歴史の根底にあるものです。ただ、二一世紀のアメリカでは理解しにくい。なぜなら、現代文明には大学の研究の恩恵があまりにも明白だからです。実際、今日の私たちの生活は科学と研究の恩恵に大きく影響を受けています。私たちは二五〇年前よりもより長く生き、より健康で、より豊かに暮らしています。反知性主義者はこのように生活水準が上がったのは大学、つまり科学のおかげであると認識していないのです。彼らがそれを理解していないことに、私は愕然とします。

そして、私たちにも反知性主義の一端があると言う人もいます。テクノロジーで大富豪になった起業家の中には、「大学に行くな。自分で考え始めろ」と言う人もいます。しかし実際には、彼らが考えて生み出した「革新」の土台は、大学で行われている基礎研究の上に築かれているのです。トランジスタや電気を理解していなければ、彼らが生み出したような革新はないでしょう。彼らのうち何人かは実務家と呼べる人たちで、大学にはいないタイプの人たちかもしれませんが、彼ら全員が大学から生まれたアイデアに依存していることは確かです。

マードック、ザッカーバーグ、マスクは真実を歪曲する道を選んだ

――FOXニュースは、二〇二〇年の大統領選挙は不正だとするトランプ大統領の虚偽の告発を広めました。虚偽を伝えるメディアが淘汰（ふるい）されないのは何故なのでしょう？　あなたは「現代の経済学では、情報は公共財だと考えられている」と書かれていますが。

スティグリッツ　これは、私たち社会が直面する根本的な問題です。現代社会が機能するためには、真実を確かめる機関が必要です。それが報道機関の役割であり、大学の役割です。しかし、真実を好まない人々がいます。おそらくそれは、私たちの教育制度の失敗が原因でしょう。私が本書で主張し、強く感じているのは、少数の富裕層に権力を与え、社会のナラティブ（物語）や世界観を作り上げるのは根本的な誤りだということです。フリードマンとハイエクについて述べたように、彼らは超富裕層と権力者の利益のために働きました。彼らのやり方は、自由市場は成功するというイデオロギーを語ることでした。マードック（FOXを創設したメディア王）がやっているのはまさにそれです。彼はハイエクやフリードマンほど思慮深くない話を語っています。ハイエクやフリードマンが構築した複雑な世界は間違っていましたが、知的な強さをもっていました。マードックはただ嘘をついているだけです。自分たちの権力、つまり超富裕層と権力者の利益のために嘘をついているのです。

そういうことを許してはならないのです。私たちの社会が、少なくとも真実を共有し、生み出し、調査を行い、国民の支持を得て、そしてそれを共有する手段を提供するという重要な役割を担うべきです。だからこそ、私は公共放送、そして独立系ニュースメディアを強く支持しているのです。中には「政府が資金を出せば独立は不可能だ」と言う人もいます。

しかし、北欧諸国や英国のように信頼できる独立機関の設立に成功した社会もあります。FOXのニュース配信が、真のニュースにならないように、イーロンマスクがX（旧Twitter）をコントロールしても、誠実なプラットフォームにはならないことは明白です。

――「ザッカーバーグもマスクも、政治家による偽情報を拡散する道をえらんだ」と書かれていますね。彼らが社会の分断に大きな影響を与えていると思いますが、ソーシャルメディアがこれだけ市場支配力をもつ状況を改善するにはどうすれば良いのでしょう。

スティグリッツ　先ほど申し上げたように、具体的な提案は三つあります。一つ目は、公共ソーシャルメディアが必要だということです。真実を歪曲するマスクやザッカーバーグに支配されていない、公共プラットフォームが必要です。彼らは、ロヒンギャを扇動したり、ロヒンギャに対する暴力を扇動したりしても気にしません。金儲けになるものなら何でも構わないのです。それで社会分断が起ころうと、それが殺人であろうと、それで金儲けできるなら良いのです。それが彼らの考え方です。私は、空恐ろしい話だと思います。ですから、まず公共のソーシャルメディアが必要なのです。

二つ目は、メディアやプラットフォームの市場支配力への規制が必要です。「満員の劇場で『火事だ』と叫んではいけない」と、私たちは常に言ってきました。不必要に人々を煽（あお）ったり、混乱を引き起こすような言動は許されないのです。

三つ目は、児童ポルノの取締りです。しかし、その量、拡散性（バズる度合い）、拡散するスピード、そしてターゲティングなどの要因により、私たちは情報エコシステムにおいて、かつて経験したことのない問題に直面しています。つまり、私たちは規制の境界線を引き直す必要があるということです。そして、例えば欧州が「デジタルサービス法」で行ったように、社会的な有害性について考える必要があると思います。

「進歩的資本主義」は「資本主義」とは違うものをめざす

――あなたご自身が提案する「進歩的資本主義progressive capitalism」について、「このシステムは『資本主義』と銘打ってはいるが、現行の資本主義からの大いなる離脱を意味する」と書いていますね。ならば、どうして「資本主義」(capitalism)という言葉を使ったのでしょうか。

スティグリッツ　それはすばらしい質問です。実は、「資本主義」という言葉を使うことに、私はとても不安を感じていました。にもかかわらず、その言葉を使った理由は、私が本書を執筆したアメリカでは、それが人々に理解できる概念だったからです。私が彼らと関わりのない世界に生きていると思われたくなかったからです。彼らは市場経済を資本主義と捉えています。そこで私は、「私は市場経済を望んでいますが、ただの市場経済以上のもの、普通の経済以上のものを望んでいる」と言いました。そして、思いついた最良の言葉は「進歩的資本主義」でした。しかし、この言葉にまだ私は納得できていません。ヨーロッパでこのことについて話すときは、「活性化した(rejuvenated)社会民主主義」と言います。「活性化」とは、多くの社会民主主義者が支持してきた新自由主義からの脱却を意味します。私は「社会民主主義」という言葉が好きです。なぜなら、それは「社会」と「民主主義」を強調してくれるからです。どちらの言葉も私の経済アジェンダ（行動計画）の一部であり、私はそれらを別のものとしては考えていません。なかなか良い言葉が思い浮かびませんね。あえて言えば、政治、経済、そして社会を一つにまとめようとしていることを強調する「進歩主義」という言葉でしょうか。「進歩的資本主義」の概念は時代を経ても変わっていません。

――その言葉を冠した前著『PROGRESSIVE CAPITALISM』の発刊からすでに六年経ちますが。

スティグリッツ　私がその本で書いたこと、その時点で私に必要だったことは、さまざまな制度的取り決め、抑制と均衡のシステムに対して、それを包括するような分類をすることでした。トランプの登場と、この六か月の間に起こったことを受けて、私の考えは次のように変化しました。抑制と均衡のシステムを構築することがどれほど困難になるか、私は完全に理解していなかった。私たちは、トランプの暴政に対して、より優れた抑制と均衡を考えなければならない。しかし、適正な手続きなしに南スーダンやエルサルバドルに人を強制移送できるという考えは、あまりに衝撃的でした。

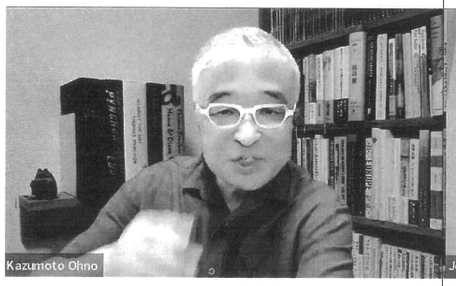
――アメリカの法規範は、破壊される瀬戸際にあるのでしょうか？

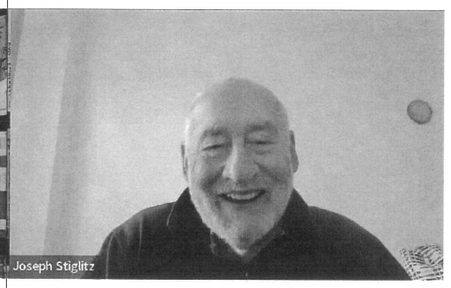
スティグリッツ　そうです。私は常にこう言ってきました。一人の人権を侵害することは、全員の人権を侵害することだ。マスクを着け、身元も明かさない政府職員が、路上で誰かを捕まえ、裁判もせずにエルサルバドルや南スーダンに送り込んでいます。彼らは悪い人だけを捕まえると言いますが、裁判は行われない。適正な手続きもない。彼らは時に間違いを犯します。ひょっとしたら私も間違われて捕まり、救済措置もなく、ひどい刑務所に入れられるかもしれません。私たちの民主主義の文明の本質は、すべての人が守られることなのに、それが踏みにじられているのです。

――世界が差し迫った気候変動という存亡の危機に直面している今、「現在の新自由主義的な経済システムは、環境的にも、社会的にも政治的にも、経済的にも持続可能なものではない」と書き、その新自由主義から脱却するのに必要なのは、革命までは至らない、「民主主義制度の範囲内でできる限りの」「大規模かつ急激な変化」を伴う改革を行うことだとして、アメリカのニューディール政策や、第二次世界大戦後のイギリスの福祉国家の創設を挙げています。ただ、今回の気候変動は世界がまとまって改革を行わないと効果がないと思われます。誰がイニシアチブをとってこの改革を行うと実現可能性がある、とお考えでしょうか。もちろんトランプではありませんね。

スティグリッツ　もちろんトランプではありません（笑）。私たちは今、リーダーシップの欠如という局面にあります。それは私たちも理解しています。ボルソナロ、オルバン、モディ、トランプといった強力な人物たちが登場し、その空白を埋めてきました。人々は強いリーダーシップを求めていますが、これらの人物は皆、それぞれに独裁主義的です。当然ながら、私はこの事態を非常に懸念しています。唯一の対抗手段は、市民社会、つまり個人が結集し、大きな声で、「これは私たちが望んでいることではない、これは私たちにとって良くないことだ」と訴えることだと思います。そして、それはすでに起こっています。六月に行われた全米規模のデモでは、何百万人ものアメリカ人がドナルド・トランプに抗議しました。これほど大規模な抗議活動はかつて一度もありませんでした。市民社会が成長しつつあるという感触はあります。ここから新たなリーダーシップが生まれるでしょう。このトラウマを経験した人々が現れるでしょう。彼らが、民主的なプロセスの成功に必要なのは、耳を傾け、共感力のある人々、そして異なる種類のリーダーシップだと気づくことを願っています。今のところ、私たちはそれを理解していません。そういった潜在能力を持つ人はたくさんいますが、私たちは明らかにトランプというトラウマを体験しています。一九三〇年代にも同じようなことを経験しました。世界中に多くのファシストリーダーや権威主義的なリーダーがいました。そしてその後、非常に優れたリーダーが現れ、それらと闘い、新しい社会を築いたのです。 **k**

（二〇二五年七月七日　ズーム・インタビュー）


Kazumoto Ohno


Joseph Stiglitz

おおの かずもと　ジャーナリスト。一九五五年、兵庫県生まれ。東京外国語大学英米学科卒業。一九七九年～一九九七年渡米。コーネル大学で化学、ニューヨーク医科大学で基礎医学を学ぶ。その後、現地でジャーナリストとして活動開始。国際情勢から医療問題、経済まで幅広い分野の取材・執筆を行う。著書に『英語の品格』（ロッシェル・カップとの共著）、編著書に『未来を語る人』（共に集英社インターナショナル）、『コロナ後の世界』『アメリカの罠』（共に文春新書）など多数。